

今昔物語

山や海に囲まれ、京築地域の中核として人が行き交い、歴史と文化が育まれてきた行橋市。昔懐かしい行橋の風景や町なみの、「今」と「昔」をご覧ください。

～ Vol.034 俳人・竹下しづの女 ^{じょ}

8月19日は「俳句の日」です。「8（は）・1（い）・9（く）」の語呂合わせから、平成三年（1991）に俳人・坪内稔典らの呼びかけによって制定。身近な自然や暮らしの一場面を五・七・五の17音に託す俳句の魅力を広める日です。

行橋には、古くから地域に根付く伝統芸能「連歌」があり、言葉をつなぎながら人と人の心を結ぶ文化が育まれてきました。そして、この豊かな文化風土の中から、近代俳壇を代表する女流俳人・竹下しづの女が誕生します

1945年頃 / 昭和20年頃

■ 竹下しづの女

本名^{しづの}静迺。明治20年（1887）、京都郡中川村（現在の行橋市中川）に生まれ、幼少より学問に親しみ、末松謙澄^{けんちよう}の兄・房泰^{ふさやす}から漢詩の手ほどきを受けました。師範学校卒業後は教員として教育の道に進み、結婚を機に句作を開始。吉岡禅寺洞^{よしおかぜんじどう}に師事し、高浜虚子が主宰する俳誌『ホトギス』では、「短夜^{みじかよ}や 乳^ちぜり泣く児^こを 須^す可捨^{つちま}焉^か乎」が巻頭句となりました。母としての心情や女性の生き方を力強く詠み、杉田久女^{ひさじよ}や長谷川かな女らとともに近代女流俳句の黄金時代を築いた俳人の一人として、その名は今なお俳壇に刻まれています。



▲晩年の竹下しづの女。女性の自我や自立を詠み続け、近代女流俳句を代表する俳人として足跡を残しました。

2026年 / 令和8年

■ 中川に建つしづの女顕彰句碑

竹下しづの女の功績を後世へ伝えるため、昭和54年（1979）、「竹下しづの女句碑建立期成会」が設立され、顕彰活動が本格化。その歩みを支えたのが、郷土史家^{こうはた}・光畑浩治氏（1946～2024）をはじめとする多くの関係者でした。光畑氏は竹下しづの女の調査・研究に取り組むとともに、郷土中川の句碑建立を推進。その顕彰活動の礎を築きました。

現在も、市文化協会俳句部門を中心に「竹下しづの女顕彰俳句大会」が開催され、多くの俳句愛好家はその功績をしのび、俳句文化の継承に取り組んでいます。生誕地・中川だけでなく、地元の中京中学校にも句碑が建立され、その足跡を今に伝える郷土の文化遺産となっています。



▲『ホトギス』の巻頭を飾った「緑蔭や 矢を獲ては鳴る 白き的」の句が刻まれる。石は平尾台で採れる名石「千仏石」を用いる。

8月3日は竹下しづの女の命日「しづの女忌^き」。その生涯をしのぶ日です。今年は没後75年という節目の年。この夏、蝉の声や青空、夕暮れ時の風など、身近な季節の一瞬间に目を向け、五・七・五の言葉に思いを託してみたいでしょうか。俳句を通じて、先人たちが大切に育んできた郷土の文化を未来へつないでいく——そんな思いを新たにできる機会となれば幸いです。